

平成30年度 推薦・特別選抜・編入学 小論文
出題の意図と解答の傾向

問題 1

【出題の意図】

ビートたけし『テレビじゃ言えない』（小学館新書、2017年）から出題した。インターネットやスマートフォンの利用に関する筆者独特の口語調による社会批評である。

目に見えている出来事には、視点を変えると、それを引き起こしている別の要因が見えてくることがある。情報にも、正しいか、間違っているかという真偽の区別とは別に、たとえ正しい情報だとしても、表面的な浅い情報と、本質的なより深い情報がある。同様に、知識には、外見上の単に現象的な浅い知識もあれば、「なぜか」「どうしてそうなるのか」と問うことによって到達できる本質的なより深い知識もある。大学で学ぶのは、そのような「本質」にかかわる知識である。大学で学ぶにあたって、このような知識のあり方をどれだけ理解できているかを問うのが出題の意図である。

インターネットやスマートフォンの世代でありながら、それらに関する身の回りの現実社会の出来事について、どれだけ自分の頭で考え、理解できているか。それらに関連する文章を読み解く読解力、自分の意見を論理的に組み立てて記述する思考力と作文力を見極めたいと考えた。

【解答の傾向】

<設問 1>

筆者の見解をまとめる問題であるが、「どのような事例」によって具体的に述べているか、という条件つきである。深く考えていない事例として「ハロウィン」「レアキャラを捕まえるアプリ」「聖地巡礼」「サッカー試合後のバカ騒ぎ」などを挙げることは容易だろう。筆者は、考える手掛かりとして「スマホの通信料」を提起している。この視点からこれらの事例を見直してみると、儲けているのは通信会社とアプリ制作者であること、これらのブームが「火付け役」による「作られたブーム」であることがわかる。雰囲気だけのブームに無自覚に踊らされる若い世代と「儲かる仕組み」を作る「儲けたい大人」という構造を読み取ることがポイントである。

事例の記述にとどまり、深く考えたときに何がわかるかという点を十分にまとめきれていない解答が多かった。目に見える社会現象とその背後の仕組みという論理関係が把握できていない。解答例は次の通りである。

若い世代でハロウィンがブームになっている。彼らは、仮装した姿をSNSで拡散させ、スターになって注目を集めたいと考えている。レアキャラを捕まえるアプリや、アニメ映画の「聖地巡礼」なども同様のブームである。「スマホの通信料」を考えてみればよくわかるように、最終的に儲けているのは、通信会社とアプリ制作者である。「儲かる仕組み」を作っている人たちがいて、その人たちにお金を支払わされていることに、若い世代は気づいていない。深く考えず、雰囲気だけでブームに踊らされて、広告代理店や「ブームの火付け役」の思いのままになっている。「作られたブーム」には、「儲けたい大人」の意図が少なからずある。(290字)

<設問 2>

解答の作成にあたって、課題文をよく読み込んで内容を理解することが重要であるのは言うまでもない。それと同時に、設問文をよく理解してその指示に従うことも大切である。出題者が何を求めているのか、解答の作成ではこの点に留意することが不可欠である。

設問は、(1) ネット利用の「メリットとデメリット」についてのあなたの考えと、(2) 「筆者の見解」に対するあなたの意見を求めている。それにもかかわらず、ネットでは瞬時に容易に情報を得られるが、その情報は必ずしも正しいわけではないので、注意して自分でよく考えて見極めるべきだ、あるいは、メディアリテラシーを向上させるべきだ、というように、ネット利用の「メリットとデメリット」、あるいはネット利用の心構えについて自分の意見を述べたものが大多数だった。

求められているのは「筆者の見解」に対するあなたの意見である。まず、「筆者の見解」を正しく理解することが必要である。筆者の論点は、ネット上の情報が間違っているかどうかにあるのではない。

「間違った情報は論外」と明言し、「正しい情報だとしても」「奥」まで到達しない」と述べている。つまり、情報の「深さ」を問題にして、ネットに書かれていない「もっと深い世界」があると主張しているのである。

設問の指示に従って、この「筆者の見解」に言及できていたものはわずかだった。「深い世界」は、経験や感動によって得られるものだと、自らの具体的な体験などを挙げたものが散見された。逆に、著名人の本心などは、ネットの情報でこそ接することができるとして、ネットにも「深い世界」があると筆者に反論したものもあった。いずれも一定の評価を与えた。

小論文といえども「論文」であるという基本的なことを理解していない解答が目についた。「論拠」と「帰結」という論理的展開が求められているにもかかわらず、「したがって」や「それゆえに」などの接続詞もなく、単に本文を書き抜いて並列しただけのものや、単に「賛成」「反対」とだけ述べたものもあった。マスを埋めさえすれば小論文になるわけではない。いわゆる「対策」が裏目に出たと思われるステレオタイプ（紋切り型）の解答があるのは残念である。

これまでにない新たな情報を自分自身がネットに掲載する場合のことや、そもそも大学で学ぶことが「その道の権威」に話を聞くことにつながる、という視点や発想は皆無だった。「深い知識」は必要ないと述べたものがあったが、いったい何のために大学に進学するつもりなのだろうか。

「誤字」は受験者として恥ずかしい。異和感（違和感）、指適（指摘）、専門（専門）、講議（講義）、練絡（連絡）、手転（手軽）、無中（夢中）、頭能（頭脳）、知脳（知能）、団圧（弾圧）、真疑（真偽）、格散（拡散）、便理（便利）、諸ける（儲ける）など、枚挙にいとまがない。また、読まれることを念頭において、文字を丁寧に記述し、極端に薄い鉛筆は控えた方がよい。

問題 2

【出題の意図】

日本における ICT (Information and Communication Technology) に関する諸資料から、日本の ICT 産業の変遷とその状況を正確に読み解く能力、さらに、資料を参考にして、人々の生活を豊かにするという抽象的な課題に対して、ICT 技術の具体的な利用と活用の可能性を、個性的に、論理的説得的に表現できているか、を問うのが出題の意図である。そのことによって、経済学部に入学するために、受験者が日頃どれだけ現実社会の経済事象や情報に関心に向け、自分の意見を論理的に記述する文章力の向上に努めているかを見極めたいと考えた。

【解答の傾向】

<設問 1>

図表 1-1 からは、①1985 年から 2013 年までの 28 年間の ICT 産業の実質国内生産額が、ほぼ 40 兆円から 100 兆円へ 2.5 倍の成長があったこと、②部分的な変化では、ICT 産業領域として、情報通信関連建設業が消滅し、インターネット付随サービス業が加わったこと、③情報サービス業、通信業の生産額の増大が約 4 倍と顕著であり、ICT 産業全体の実質国内生産額の拡大を牽引していること、この具体的内容が図表 1-3 に関連していること、などを読み取ることを期待した。

解答では、2.5 倍の成長があったとするものは極めて少なく、「2 倍以上」と記述するものが多かった。図表の経過年数や実数値を記述することなく、「大幅な増加」、「著しく増加」、「圧倒的に多い」などと記述する解答も多く見られた。

図表 1-2 からは、①ICT 産業の成長率は 1985 年から 2013 年までマイナス成長がなく、特に実質 GDP 成長率が下がった時期にもそうであったこと、このことから、②ICT 産業の成長が日本の経済全体の成長に安定的に寄与してきたこと、③今後もこの産業の成長が日本全体の経済成長に影響を与えること、などを読み取ることを期待した。より高度には、ICT 産業全体の年平均成長率を、図表 1-1 の実質国内生産額の変化と関連付けて理解できているか、などがポイントだった。

解答では、GDP 成長率変化の背景を、リーマンショックやバブル経済で説明するものが多く、生産額や売上額の変化と成長率の関係を、ICT 産業の成長率と GDP 成長率の比較検討から読み取っていたものは、残念なことに極めて少なく、評価に差が付いた。

図表 1-3 では、図表 1-1 の情報サービス業、通信業、インターネット付随サービス業の変化を、同図に示された具体的な業者売り上げに連動させてその内容を理解できているかを見た。

解答では、NTT の民営化以後、通信自由化、規制緩和、自由競争、新規参入が、これらの産業分野の規模を増大させる環境となったことに気付いているものは少なく、単にソフトバンクグループの参入の事実を述べるものが多かった。図表から読み取れる現在の KDDI、ソフトバンクグループ、NTT グループの 3 グループ体制を打破する自由競争の活性化とその他業者の参入、発展が今後期待されることにまで記述を広げていた解答には高評価を与えた。

解答全体として、実数値を明記して説明するものは少なく、「率」という概念を理解出来ていないものが多かった。日常的に、社会現象や経済現象などを「様々な概念」の数字として深く理解する努力

を受験生に期待したい。

＜設問 2＞

自治体における公共サービスとしての ICT 利活用の分野別実施率の経年比較を表した図表 2-1 と、様々な ICT サービスの年代別利用傾向を表した図表 2-2 を読み解き、私たちの生活を豊かにするためにどのような ICT 利用の将来的な利用と活用方法があるのかについて、個性的かつ論理的な解答を期待した。

解答は、大きく 2 つに分かれた。1 つは、「参考にして」という問いを考慮せずに、老人介護や防災などへのスマートフォン利用方法について説明するだけのものが少なくなかった。もう 1 つは、設問を念頭に置いてはいるが、図表 2-1 と図表 2-2 のそれぞれの内容を単に解説するだけのもの、あるいは 2 つの図表の内容を紹介しているものの、今後の利活用について総花的に記しただけで、これらの関連付けについて説明していないものが多かった。

出題の意図には、経済学部への入学を希望するという動機の下に、今日の経済情報等にどの程度の興味関心をもっているかを見ることが含まれていた。そのバロメータとして、設問 2 の解答の記述内容に、経済発展と密接に関係する人工知能、ロボット開発、VR 開発、自動運転や新しいナビゲーションシステム、テレワーク、電子カルテ、遠隔治療など、今日頻繁に紹介されている情報知識が取り入れられることを期待したが、これらに関する記述は少なかった。また、「人々の生活をより豊かにする」という概念について言及した上で、ICT の利用と活用について触れた解答は極めて少なく、それらには高評価を与えた。

問題 2 では、数によって示される実態とその社会的意味を正しく理解し、このことを設問に応じて論理的に説明する文章力が問われた。しかし、それ以前に小論文の基本である誤字脱字や乱筆に注意することが必要であり、そのためには日頃から文章を書く習慣を身に付けておくことが大切である。